

磯部卓三・栗原理 著
『愛の教育者——鶴虎太郎』

(書肆クラルテ, 2017年, 四六判228頁, 1600円+税)

谷口 重徳

1 本書について

本書は私学教育に尽力した鶴虎太郎(1870-1951)の教育実践をたどる書である。鶴の教育実践は、後に「教育は愛なり」という言葉で伝えられている。鶴が直接の創立者となっている学校は、現在の広陵学園(広陵高等学校)、広島国際学院(広島国際学院大学および自動車短期大学部、広島国際学院高等学校)である。また、四男・襄によって創立され鶴虎太郎を校祖とする鶴学園(広島工業大学、広島工業大学高等学校、広島なぎさ高等学校および中学校、なぎさ公園小学校)も含め、これらの3校はいずれもこの言葉を建学の精神にしている。さらに、広陵中学(現・広陵高校)から別れて設立された広島山陽学園山陽高等学校、石田学園(広島経済大学)なども遡れば鶴の教育実践と全く無縁ではないと言える。このように見ると、首都圏や関西圏などの大都市圏とは比較にならないほど、地方都市である広島市での鶴の教育実践の影響は大きい。

本書の著者である磯部卓三先生、栗原理先生は、共に鶴の創立した広島国際学院大学でも教職に就かれていた。とはいえ、本書は、学園関係者による創立者の単なる伝記ではない。実は評者も同大学にて教職にあり、著者のお二人による本書の執筆過程の一端を垣間見させて頂いたのだが、本書は、10年以上の歳月をかけ(構想段階から含めると20年以上と拝察する)、学問的な厳密さと中立性を保ちながら各地に点在する関係者の証言をたどり、丹念に資料を掘り起こして書かれた労作である。

言うまでもないが広島の近現代史に関わる研究には特有の困難がある。終戦直前の原子爆弾によりその時代を知る人間の多くと共に行政機関や報道機関、図書館などに保持されていたはずの記録までもが失われてしまったからだ。そしてさらに難しいことに、著者らによると、鶴はもっぱら教育実践に尽力し、まとまった教育論も実践報告も残していないという。鶴は日記もつけておらず、28歳の頃(明治31年=1898年)にキリスト教との出会いによって生じた「霊的大覚醒」によりそれまで持っていた品々を処分してしまったという。そうした条件の中で鶴の足跡をたどっ

た著者らのご労苦に対して畏敬の念を抱かずにおられない。

本書の構成は次のようになっている。Ⅰ 柳川における鶴虎太郎，Ⅱ 私塾教師から塾主へ，Ⅲ 広陵中学校の設立，Ⅳ 広陵中学校のその後，Ⅴ 広島電気学校の設立，Ⅵ 戦後の学校再建，Ⅶ 愛の教育者・鶴虎太郎。

本書の意義は多くあるが、次の3つを指摘したい。①本書は、鶴に焦点を当てることで広島における近現代の私学をめぐる状況を明らかにしたことである。本書は広島教育、とくに私学教育に関心を持つ者にとっての資料的価値を持つ。また、②本書は鶴自身の人生の軌跡を縦糸に、日本の近現代における出来事や教育界の変遷を横糸に編まれた良質の社会学的なライフヒストリーを読むような感覚を与えてくれる。さらに、③鶴の教育実践そのものの紹介を通じ、教育のあり方について深い示唆を与えてくれる。本書は穏やかな語り口の中に教育のあり方について随所に鋭い直球の問いが投げられ、読む者に緊張感を与えてくれるのである。

2 広島における近現代の私学をめぐる状況

本書の中で広島における近現代の私学をめぐる状況が特に詳しく描かれているのはⅡ章、Ⅲ章、Ⅳ章、Ⅴ章である。まずⅡ章では、鶴が郷里の柳川を出て、東京を目指す旅の途中に立ち寄った広島で教育に関わる経緯が示される。広島において鶴が数学の個人教授、そして塾講師となったことがきっかけで（26-29頁）、明治29（1896）年に私塾の「数理学会」を設立（30頁）。その後、明治32（1899）年に「究数学院」と改称する。そこは「生徒たち自らが探求し、自由に考え、自由に意見を述べることを重んじる塾」（37頁）であると同時に、「禁酒禁煙の教育方針」（33頁）を取るなどの特色がみられる。

Ⅲ章では広陵中学校の設立に至る経緯が詳細に明らかにされている。まず、この究数学院の中学科が明治34（1901）年12月に「私立広陵中学」と改称される。当初はあくまでも鶴の私塾であったので、正式の中学校として文部省の認可を受けるべく鶴が奔走する様子（56-58頁、66-68頁）やその当時の広島における中学校の動向（55-56頁、75頁）、石田米介（石田家）による支援（58頁）などが明らかにされている。さらに、広島で初めての高等学校（広島高等学校）設立と中国地方に初めての大学の設立（広島文理大学）に尽力する様子にも触れられつつ（83-84頁）、まさに鶴が広島の当時の教育界の指導的立場にあったことも示される。

Ⅳ章では、2度にわたり鶴が広陵中学を追われることになった広陵事件と呼ばれる紛争の経緯が明らかにされている。鶴の教育方針に批判的な当時の理事会メンバー個々の思惑、さらには当時の社会状況などについて著者らは各種の資料をはじめ、『芸備日日新聞』などにも丹念にあたりながら読み解いて行く。その過程の中で鶴を支援した田中イト（田中家）との関係など、現代に通じる人脈にも焦点が当てら

れていく。

V章では、広陵中学を追われた鶴が昭和2(1927)年に新たに広島高等予備校を設立、さらに昭和11(1936)年、同校の中に電工科を設立し、それが後に広島電機大学を経て現在の広島国際学院大学へと至る経緯が記されている。またVI章では、鶴の四男・襄による現在の広島工業大学の前身である広島高等電波学校の昭和32(1957)年の創立の経緯などにも触れられている。

このように鶴虎太郎の足跡を辿りつつ、広島における近現代の私学をめぐる状況が詳細に記述され、そこには広陵事件のように当事者性からか、広島の教育界においてあまり語られる機会の少ない事柄についても検証されている。広島の私学教育に携わったり、関心を持ったりする者にとって本書は必読の資料的価値を持つと言える。

3 日本の近現代史と鶴虎太郎

本書は鶴虎太郎の人生の軌跡を縦糸に、また、日本の近現代史を横糸に編み込まれている。I章では、鶴の出生(現在の福岡県柳川市生まれ)から広島へ移るまでの経緯が明らかにされている。江戸時代に柳河藩主・立花氏に代々学問を持って使えた鶴家に生まれた虎太郎は、3歳ころより父から漢籍、祖父と伯父から数学を学ぶ。また、祖父・康孝は藩の和算家・宮本自得の弟子であり、虎太郎も自得の息子・宗四郎に数学を学ぶ。宮本宗四郎は学制公布後に地域での小学校設立に尽くし、その長男・久太郎は東京開成中学校長を務めるなど当時の教育界で活躍している。なお、虎太郎の祖父・康孝は宮本自得の長女・屋恵を妻に迎え、虎太郎の第二人も宮本家の養子となるなど宮本家と鶴家は姻戚関係にあり、柳川に両家墓があること(12-14頁)も丹念な取材を通じて明らかにされている。

鶴の生まれたのは明治3(1870)年であり、まさに鶴の人生は近代日本の歩みと軌を1つにしている。高等小学校卒業後、学んだ橘蔭学館は廃藩置県により廃止された藩校の伝習館が転じたものであることや、郷里の柳川で教師をしていた鶴が小学校を退職するのも明治25(1892)年2月の第2回衆議院総選挙で「民党」の成長を恐れた政府関係者による大規模な選挙干渉に抗議してのものだったこと、日露戦争後の「日比谷焼き討ち事件」をたまたま東京で目撃したこと(60頁)、そして第1次世界大戦後の戦後恐慌による経済界の動揺が理事を通じて第1次広陵事件の遠因になった可能性も示唆される(87-88頁)など、鶴の人生のディテールが日本の近現代史と重なり合う様子が丹念に描写されている。

また、IV章では地方新聞ジャーナリズムや大正デモクラシー、さらに日清・日露戦争、第1次世界大戦を通じ兵站基地としての宇品港を擁する広島の人口の増加、そしてそれを後追いする形で中学校の増設という社会的背景なども論じられてい

る。

V章では、昭和18(1943)年秋に「大陸広陵同窓会」からの招きで鶴は夫妻で京城、奉天、大連、ハルピンの各地で同窓生と再会する旅に出たことや、昭和20(1945)年8月6日に原子爆弾により4人の子どもと広島電気学校での6人の生徒、校舎を失ったことが記される。そしてVI章では戦後の焼け野原からの復興と、まさに鶴の人生の軌跡と日本の近現代史がダイレクトに交わる様子が示される。

本書ではこうした日本の近現代の出来事と交錯する形で鶴の人生の軌跡が丹念に描写される。鶴と周囲の人々とのつながり、そして、繰り返し見舞われる苦難とそこから立ち上がり、「こつこつ、もくもく」と教育実践に取り組む姿に焦点が当てられる。

子どもころの鶴が数学を学んだ宮本宗四郎、旅の途中で立ち寄った広島で教育に関わるようになった経緯、キリスト教との出会い、そして釘宮辰生との出会い。広陵中学設立から広陵事件の際の石田米介や田中イトら支援者との関係、多くの生徒、教職員、そして家族とのつながりが描かれる。

柳川時代の解職、広陵中学設立時、石田家からの支援を得られる頃に結核からの脊椎カリエスという大病を患い、そこからの奇跡的回復。広陵事件による紛争。支援を受け新生広陵中学の発足。再びの紛争による離職。広島高等予備校の設立と戦争・被爆、そして復興。まさに七転び八起きの人生である。

本書では、鶴のこれらの人とのつながりと苦難の連続の描写を通じて、「教育は愛なり」という鶴の教育理念や現実主義を踏まえた教育実践に色濃く反映されている様子が浮かび上がってくる。

4 鶴虎太郎の教育実践——「無処罰主義」教育の可能性

本書によれば、鶴虎太郎の教育理念は「教育は愛なり」という言葉で集約される。この言葉は、後年、鶴にゆかりを持つ人々の間でごく自然な形で鶴虎太郎本人の言葉として受け入れられてきたように思われる。評者自身も広島国際学院大学に着任した際、確かに周囲の方々からそのような拝聴した記憶がある。しかし鶴本人の書いたものにこの言葉はなく、この言葉を口にしたという記録もないそうである（著者らがそのことを突き止めたこと自体に感嘆を禁じえない）。本書によれば、この言葉は鶴に学んだ生徒をはじめ鶴に触れた人びとを通して、後世に引き継がれてきたものとされる。「愛を語るよりも、愛を実践した」（4頁）鶴虎太郎の姿が浮かび上がってくる。

本書では鶴の教育観に強い影響を与えたものにキリスト教の影響が挙げられている。キリスト教との出会いを通じ、鶴は神の愛が鶴本人だけでなく、彼の教える若

者たちにも注がれていることを確信し、新しい生き方をめざしていく。キリスト教、そして釘宮辰生牧師との出会いの中で「大覚醒」を経験し、「物質的」「事業的」野心を捨て、「眞人物」（後に「善人」）を教育することをめざしていく（46頁）。同時に、新島襄の無処罰主義教育に強い影響を受け、それが鶴の生涯一貫した教育方針となった様子が指摘される（51頁）。

そうした鶴の教育方針は、社会的弱者への共感として障害を持った生徒を受け入れられたり（132頁）（当時、公立中学では障害を持つ生徒は入学できず、この方針は一般の私学にも影響していたという）、貧しい生徒に対する格別の配慮をしたりしたエピソード（134頁）からも伺える。しかし、「鶴からすれば、教師が子弟を愛するのは当然のことである」（202頁）とした姿勢が、聖書の「善きサマリア人の物語」と重ねられながら指摘される。

また、「無処罰主義」を掲げる鶴は、素行の悪い生徒にとことん向き合った。悪いことをした生徒に対して校長だった鶴はそれを処罰するのではなく、生徒の悪行に対して涙を流したという。自分のために涙を流す校長を見た生徒は、深く驚き、忘れえぬ経験になったことであろう。このように「無処罰主義」による教育の可能性について示唆に富むエピソードがたくさん紹介されている。

これは、子どもに対するときのことだけではない。人は、他者によってほしいと思うものである。理想を抱いているときはとくにそうである。他者が変わらないと、大声を上げがちである。そのとき、自分のほうは変わらなくてもよいと考える。鶴からすれば、それは学ぶことを放棄するということがある。現実を変えようとするなら、自己が変わらなくてはならない。自分が変わることで、現実を直視することは一組のものである。鶴が、生涯学ぶ人であり、探求する人であったのは、なによりも現実を重んじたからである。（205-206頁）

「現実を受容し、そこに立って自分に何ができるかを考え、実行するのが鶴である」（205頁）とあるように、ここから浮かび上がってくるのは、「いたずらに理想を追わず、現実に生きよ」という現実主義者・鶴虎太郎の姿であるといえるだろう。広陵事件のように、鶴本人を批判し、排斥しようとする人びとがいることも現実である。優れた数学教師であったが、鶴の教えることが分からない生徒もいたにちがいない。「こんなことがわからないのか」という思いや他人が「理解するはず」「同意するはず」という思い込みが現実受容を妨げるという本書は指摘する。

本書の最後の部分で鶴のつくった学校が「人格」と「人格」の交流する精神のコミュニティであったことが描かれる。そうした場で生き生きと若い日を暮らす経験

は生徒たちにとって生涯の財産になったことであろうと著者らは言う（210頁）。鶴の最後の言葉は、「学校を永遠に伝えよ」というものだったという。そのような場を永遠に若者に与え続けることが鶴の願いだったと本書は結んでいる。

本書では、このように鶴虎太郎を追いながら、随所に読者に対しリアルな問いが投げかけられる。日本において大学など高等教育に進む学生の多様化が指摘されて久しい。評者もまた大学教育の場に身を置くものとして、日々それぞれの事情を持つ学生と向き合わねばならないのだが、本書の指摘する現実主義的態度や人格と人格の交流について常に自省していきたい。

以上のように、本書は私学創立者の伝記という枠をはるかに超えた射程を持つものである。とりわけ、評者自身も含め、教育に関わるものにとって教育のあり方を深く再考するための手がかりを与えてくれる。

広島国際学院大学情報文化学部
たにぐち しげのり
taniguch@hkg.ac.jp